ここがポイント
「伝えるべきこと」と
「伝えたいこと」を整理する

3　教員の思いを伝えよう

思いを伝えよう

「育てたい生徒像」は、自分が担当する授業等で、生徒に折に触れて伝えることが大切です。

教員による授業とは、生徒がその教員を通して新たな世界に触れることです。生徒は教員から知識を学ぶだけでなく、人間性をも学びます。「この先生はどのような人で、どのような思い・願いをもって授業を行っているのか・・・」生徒が教員の思いを捉えて授業に参加できれば、教育効果も一層高まるでしょう。

授業を通して伝える思いとは

授業は、教科・科目の内容を教えるだけの時間ではありません。教科・科目の学びを通して「新しい時代に求められる資質・能力」を育む時間です。

その教科・科目を学ぶ目的、学校で学ぶことにどのような意味があるのか、学んだことがどのように役立つのか等を、根拠に基づき自身の言葉で語ることで、生徒は教科・科目に親しみを覚えるはずです。

初めに伝えておくべきこと

年度初めの２～３回の授業は、１年間の生徒の取組に大きく影響します。１年間の授業を通して、何を学ぶのか、大切にしたいことは何か、初めに生徒に話しましょう。生徒との課題の共有が授業の充実につながります。

また、教員と生徒と互いの準備があってこそ良い授業が実践できます。授業での約束事もしっかりと確認しましょう。

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

学習スタイルの違いに配慮しよう！

視覚、聴覚、運動感覚等、認知特性の違いから人によって学び方には、得意・不得意があります。“熱い思い”は伝えても、教員自身のこれまでの学び方が、全ての生徒に合っているとは限らないので押し付けにならないようにしましょう。　→　１章－７

「伝えた量」より「伝わった量」

教員が伝えたいと考えている情報の量と、生徒に伝わる情報の量は必ずしも一致しません。学習の効果は生徒に「伝わった」量で決まると言って良いでしょう。適切に相手に「伝える」ためには伝え方の工夫と、生徒の状況･状態の把握が必要になります。

次に示す「『伝える』際の留意点《例》」をヒントに工夫しましょう。

「伝える」際の留意点《例》

□ **伝えたいことの要点が整理できているか**
思い付きではなく、伝える項目や順序を整えましょう

□ **伝える内容の優先順位が整理できているか**
一度に伝えずに、分量を絞って重要なことから伝えましょう

□ **情報量（話す時間等）は適切か**
インパクト＆コンパクトな発言が印象に残ります

□ **相手の感情･心理状態を把握できているか**
相手の心情を汲んだ物言いができると伝わりやすくなります

□ **自分の感情を制御できているか**
感情に任せると、伝え方だけが相手の記憶に残りがちです

□ **場面（タイミングや環境）は適切か**
個別か集団か、途中か最後か等、働きかける場面も重要です

□ **相手に「自分事」として認識させられているか**
相手の心に働きかけるような伝え方を意識しましょう

□ **語り口（音量･強弱･言葉遣い等）は適切か**
語り口が異なるだけで受け取る印象が大きく変わります

探究の道しるべ

① 同じ言葉（「どうしてこんなことをしたの」等）を異なる語り口でいくつか発言し、どのような印象の違いがあるかについて考えましょう。

② 伝え方が上手な教員の言動を観察しましょう。どのような場面でどういった伝え方をしているかについて分析し、自分の伝え方の幅を広げるために取り入れましょう。

③ 自分の話し方のくせや特徴について、周囲の教員や生徒からアドバイスをもらいましょう。

「伝え方」のポイント～先輩たちのアドバイスより～

○ 相手意識を持たない発言を「言う」、伝える意図をもった発言を「話す」といいます。相手が大人数であっても、一人ひとりの生徒に「話しかける」意識を持つことが大切です。

○ 何度声をかけても聞く姿勢が整わない時は「あえて黙る」「突然板書に切り替える」等、即座に生徒へのアプローチを変えることも有効です。

○ 「今から二つのことをお話しします。」と言いながら指で「２」を示したり、大きさや形をジェスチャーで表現したりすると、受け手がイメージしやすくなります。